



# 玖波中だより No.7



大竹市立玖波中学校 令和6年7月16日

学校教育目標 「『なりたい自分』に向かって、挑戦する生徒の育成」

発行責任者 小田 大介 文責 藤川 健二

## 全校道徳 「死児を抱いて」 水戸サツエ

7月3日(水)終わりのSHRで、校長が水戸サツエさんの「死児を抱いて」を朗読しました。そして、次の日(7月4日(木))の6時間目に、体育館で、校長が「死児を抱いて」を通して「いのちの大切さ」や「家族愛」をテーマに全校道徳を行いました。

作者の水戸サツエさんは、広島県出身の方で、長年、宮崎県の幸島のサルを研究してきた方です。「ミイラになっているのにどうして、ウツボ(親ザル)は2ヶ月も赤ん坊を抱いていたのでしょうか？」という問いに対して、多くの生徒がしっかりと自分の考えを持ち、仲間と交流する中で、「いのち」や「家族愛」について考えを深めました。途中、父親の立場から倉重が、母親の立場から新畑が、我が子が誕生した時の親の気持ちを語ってくれました。最後に、NHK 紅白歌合戦に出場された、竹内まりやさんの「いのちの歌」のプロモーションビデオを鑑賞し、自分という存在は、親からの愛情を受けた「かけがえのない存在」だということを学びました。

### 「ミイラになっているのに、どうしてウツボは2ヶ月も赤ん坊を抱いていたのだろうか？」

- ウツボは大切な子をなくしたくなかったから。死んでいるけど、まだここにいるよと伝えて赤ん坊を安心させたいから。こんなに大切にしている子が死んだから、骨になる最後まで大切にしたいから。(3年)
- 自分が初めて生んだ赤ん坊を自分が守ってあげられなくて、死なせてしまったから、せめて少しぐらいは自分も赤ん坊も幸せに過ごしていることを演技して、死んだことを受け入れたくなかったから。(3年)
- 最後まで一緒にいたい。亡くなってしまっても、我が子は我が子だから。子供を産んだのにすぐに無くなってしまい悲しかったから(まだ一緒に過ごしたい)。自分の宝物だったから。現実を受け止められなかったから。(3年)
- 人間同様、子供が自分より早く死んでしまうと親は悲しいものです。その辛さを緩和するため。その事実を知りたくなかったウツボの感情がにじみ出た結果が2ヶ月も赤ん坊を抱いていた理由だと思います。(2年)
- ミイラになっていたとしても、自分の大事な子供を大切にしたいと思ったから、自分の子供が死んだことを認めたくない、現実を見たくないなどの思いがあったから。(2年)
- 死んでも親子という関係は変わらないし、赤ん坊は最期までお母さんにしっかりしがみついていた、お母さんも赤ん坊を大切にしていたし、愛を注ぎ続けたからだと思います。(2年)
- 死んでいるのがわかっているのがわかっているけど、本当はもっと自分の手で育てていきたいから、自分の子供を手放したくないという思いが強かったと思った。(1年)
- 寂しい、悲しいという思いで、ちぎれていても自分の子供が残っている間は一緒にいたいと思ったから。(1年)

### 授業を通して学んだこと

- 命はかけがえのないものだけでなく、みんなにとってとても大切なものということもわかりました。だから、どんな人も様々な生き物たちも命を守っていき、共に生きていきたいです。これからも命を大切に生きていきます。(3年)

○親は、子供をととても大切に思っているということが分かりました。亡くなった子の死体を2ヶ月抱き続け、生きているときのように扱ったウツボの姿や、倉重先生、新畑先生のお子さんの産声だったりエピソードだったり聞いて、親は子供が大切なんだと改めて分かりました。(3年)

○親に改めて「ありがとう」と伝えようと思いました。倉重先生、新畑先生の赤ちゃんが生まれた時の思いを聞くことが出来て、自分の親もそう思っているのかな～って考えることができて本当によかったです。(2年)

○グループで意見を交流したことで考えが広がってよかったです。倉重先生と新畑先生のお話を聞いたり、命に関する歌を聴いたりして、命の大切さを知ることができました。人間とサルは違う生き物だけど、子供に対する愛情などは変わらないということが分かりました。(2年)

○命とは、親からのプレゼントでとても大切にしないといけないことが分かりました。ウツボは死んだ子供をしっかり支えていたのは、ウツボにとって一番の宝物でずっと一緒にいたかったことが分かりました。(1年)

○命の大切さを改めて知ることができました。私たちを育ててくれた親はとても大変な思いをしながら、ずっと大切に守ってくれているんだなと思いました。日頃の感謝を伝えたいと思うけど、少し難しいと思ったので、お手伝いをして行動で感謝を示していきたいです。(1年)

めっきり年をとったウツボ。死んだ我が子を2ヶ月あまりも肌身離さず持ち歩く姿は、ウツボにしか分からない子への深い愛情といつくしみが感じられます。死んだものの、ウツボはあたかも自分の一部のように感じ、そして、目の前にある我が子の死を認めようとしません。事実は「死」なのに、その歴然とした事実さえ否定してしまう、断ちきっても切れない母親と子供の繋がり強さをひしひしと感じます。それだけ母親は自分の子への「愛情やいつくしみ」は深いものなのです。

人は、身近な人が亡くなったら、今日は通夜、今日はお葬式、今日は初七日、今日は49日と、定まった習わして、亡くなった方へ分かれを告げていきます。しかし、ウツボは、サルです。ウツボは、習わしなど知りません。ウツボの取った行動は、本来親として、身に付いている「本能」なのです。それは、人間も同じです。

親から伝えられたかけがえのない命、その命は、サルであろうが、人であろうが変わりはありません。生命に軽重はないのです。それだけの重みを帯びた、「命の尊さ」を、ウツボの生活から感じ取って欲しかったのです。与えられた「かけがえのない命」を精一杯生きていくことが、産み育てた両親や家族にとって、一番の恩返しであることを忘れないでいてほしいと思います。

みなさんも、いつかは父親になり、母親になるときがくると思います。その時、今回の「死児を抱いて」のことを思い出してもらえると嬉しいです。



### 「いのちの歌」 竹内まりや

生きてゆくことの意味 問いかけるそのたびに  
胸をよぎる 愛しい人々のあたたかさ  
この星の片隅で めぐり会えた奇跡は  
どんな宝石よりも たいせつな宝物  
泣きたい日もある 絶望に嘆く日も  
そんな時そばにいて 寄り添うあなたの影  
二人で歌えば 懐かしくよみがえる  
ふるさとの夕焼けの 優しいあのぬくもり

本当にだいじなものは 隠れて見えない  
ささやかすぎる日々の中に かけがえない喜びがある

いつかは誰でも この星にさよならを  
する時が来るけれど 命は継がれてゆく  
生まれてきたこと 育ててもらえたこと  
出会ったこと 笑ったこと  
そのすべてにありがとう  
この命にありがとう